特2
708

# 基督教と社會問題

同志社大學法學部教授　中島重

始

特240
708

帝國圖書館藏

# 基督教と社會問題

昭和三・八・一七・内交

# 基督教と社會問題

## 一

基督教と社會問題との關係は、基督教の立場から社會問題を研究すること、、社會問題の解決に即して基督教の立場を反省すること、の兩方面を含む。此兩方面は互に先後なく進んで、その結果が相照合せなければならぬ。此處には先づ第一に基督教の立場より社會問題を研究し、第二に社會問題の解決に即して基督教の立場を反省すること、する。

## 二

基督教の立場より社會問題を研究するといひ條、社會問題の發生する地盤となる社會事實の認識は、事實を事實として認むるそのことが基督教の精神に協ふのであつて、此點は純然たる社會學の科學的認識の態度を失はないことが肝要であり、此態度を何處迄も守ることが基督教の精神そのもの、要求だといふことを知らねばならぬ（カントの宗教と科學との區別論）。

し乍ら、社會問題といふ問題の捉み方そのものには、基督教の精神が表るべき筈である。何となれば社會問題は人間の要求と理想とに照して、社會の現狀の或部に不滿足あることを意味するか故である。即ちその問題を捉む前提に基督教的精神に基く要求と理想とが持ち來されるは當然のこと、なるのである。而して既に問題の捉み方が基督教的であるならば、その問題の解決たる將來社會の組織が又此問題の解決に適したるもの即ち充分基督教的精神に適合したるものたることを要求するは是亦當然の要求といふことになる。從つて又此將來社會の實現手段に就ても基督教的精神に基いてなさるべきことを要

求するは至當の要求といふことになるのである。

## 三

社會の進化は今日迄の處大略三期に分つことが出來る。第一期は原始時代であつて國家發現以前である。第二期は武斷的權威主義の時代であつて、國家權力と宗教上の權威との結合して居つた時代である。第三期は公民的自由主義の時代であつて、宗教と國家とが離れ、國家は公民の共同團體となり、全體社會より分化するに至つた時代である。而して今や此第三期の終に近つき、一面に國際社會の發達によつて、インタナショナリズムの實現を翹望し、又他面産業組織の進化に依りて、industrial democracy への轉化を觀んとし、進化階段の新しき第四期に入らんとして居る時代である。

今此三階段の各を今少しく詳細に述べ現代に進むに隨つてその詳細の度を增して行けば次の如くなる。

第一期の前期は部族 tribe 氏族 gens の時代であつて、生産は狩獵漁撈に過ぎず、家族無く團體婚姻の制に依り、女系主義行はれ、トーテミズムの宗教がタブー等と、もに行はれて、法律や宗教や道德は萌芽的にともに慣習のうちに未分化に包含せられて居つた狀態である。未だ國家なるものは無い、酋長はあつたけれども權力極めて微弱であり社會は階級無く、上下層無く、極めて共同的であつて、結合緊密にして、その結合の基礎は血緣に在つた。

第一期の後期は父權社會 patriarchal society であつて、大家族主義の時代である。牧畜の發明は前時代の社會を一變して此時代の出現を促した。牧畜に次で農業が行はれるやうになりて、益之を助長した。奴隷制があらはれた。財産が出來た。土地の價値が解るやうになつた。家長を中心の大家族主義の社會となり、男子專制の一夫多妻の婚姻制が現れた。養子制度家督相續等が現れ、宗教は祖先崇拜教となつた。一つの家族から多くの家族が分れて氏族 clan が出來る。此氏族のうちで宗家の家長が族長 patriarch としてその氏族を統率した。多くの近親の氏族が集まつて部族 tribe を爲した。未だ、國家



は無い。家族内部の家長權に依る統制は可なり强烈なる統制であり、又族長を中心とする氏族も可なり强い統制力を持つたものであらうが未だ國家とは言はれない。社會結合の基礎は依然として血緣に在つた。法律、宗教、道德は矢張り未文化に慣習のうちに含まれて居つた。政治(萌芽的)と宗教とは不離の關係に在つた。人類は原始時代から好戰的鬪爭的なる一面を持つてゐるが、此時代他の社會の侵略に對する防禦の爲め、又他の社會を進んで攻掠する爲め、社會は漸次軍國的となつて行つた。就中牧畜を業としたる遊牧的社會は非常に軍國的であつた。族長の外に戰爭の司令官が出來て後にはそれが族長を兼ねるやうになつた。而して、斯の如き族長に對する服從は軍國に於ける統制力の强さの必要と、もに、益々絶對的忠誠の性質を帶ぶるに至つた。國家は斯の如き狀態を基礎として發生したのである。

國家の發生とともに第二期の武斷的權威主義の時代が始る。國家の起源が種族移轉 migration と征服 conquest に在るは恐らく爭はれない事であらう。剽悍なる遊牧民が富裕にして平和的、土着的なる農業民を征服し、同一土地に征服民と被征服民とが共在して、作り出したものが國家である。征服は二重にも三重にも行はれ、社會層は二つにも三つにもなつて、多數の氏族や部族が同一土地に定住共在するに至つたものであらう。此宗教や慣習や、言語其他の文化を異にし、殊に血緣を異にする多數の異分子を同一土地に共在せしめて、一の民族 nation とする迄には、實に强烈なる武斷的統制力を必要としたのである、此時代の特色は社會が地緣的になつたこと、强烈なる武斷的統制力が成立し、社會に組織が出來たこと、而して宗教が部族宗教たるトーテミズムや祖先崇拜より一進化して、人格的多神教たる民族宗教 national religion となつたことである。新なる民族宗教は征服民の宗教の進化したものか、又は征服民と被征服民の兩者の宗教の融合の結果出來たものかの何れかであつた。而して此宗教が武斷的統制力と結合して新社會を統一し融合せしむる役目をしたのである。主權者は神であるか又は神の代表者であるとされた。此時代は政治と宗教、國家と教會の未分化の時代である。宗教道德法律は慣習よりは分化したけれども、未だ三者相互の間には明確なる分化なく、半自律、半他律の狀態に在つた

歐洲中世紀の特色は基督教といふ普遍宗教人類宗教を以て、如上の如き役目を演ぜしめた點に在る。卽ち、ローマ教會の教權と、神聖ローマ帝國の政權とが結合して、未だ、部族氏族の社會狀態に生活し民族を作るに至らざりし西歐諸民族を統制し教化したのである。封建制が之に伴うた、家族主義は東洋程では無いが殘存して居つた。社會は未だ殆んど商工を知らずして農業の上に築かれたのである。宗教や道德の自由は無く、人民は武斷的統制力と教會の宗教上の權威とに對しては絕對服從の態度の外何者も許されなかつた。

第一期の社會狀態は前期のものはアフリカの土民、オーストラリヤの土人、アメリカ印度人等の間にて之を見ることが出來、第一期の後期のものは蒙古や中歐亞細亞の奧の方の社會に於て恐らく今日と雖も之を觀ることが出來やう。第二期は西洋では最早や見られない。東洋では見られる。支那朝鮮は昨日迄此だつた。日本も明治維新迄此だつたのである。

第三期の公民的自由主義の時代は如何にして出現したか。其原因は一面は經濟的であつて、商工業、貨幣經濟の勃興、都市の發達、平民階級の擡頭であり、他の一面は宗教改革である。然し乍ら社會自體の進化から言へば今迄の非融合の社會層が、融合混一して民族 nation といふ一層高次の地緣的新社會を現出したことに在る。民族といふ等質的共同社會が出來、精神上の自由が實現せられて、近代國家が出來た。卽ち一面ローマ教會と神聖ローマ帝國との統一が崩壞し、他の一面封建的制度が統合せられたのである。民族國家はやがて立憲國となり、人民の信教以下の諸種の自由を保障し、人民の參政權を認め、段々共同團體としての民主的自治的國家に迄發達して行つた。第三期の社會階段に入つた目印は信教の自由にあつたことを牢記しなくてはならぬ。

今日の民主的國家は此處を出發點として居るのである。此第三期の社會狀態は西歐洲に初めて實現せられ、次で米國に、又日本に實現せられ、今や支那等にも實現せられんとして居るのである。



## 四

此處で私は國家と社會との本質に就て簡單に說明して置かねばならぬ。

第三期の國家は最早や全體社會そのものでは無い。國家の外に教會が出來、諸種の團體が出來、それが國境を超越して結合し、人類の社會關係は最早や國境以上に溢れ出て居るのである。又第三期の國家は最早や、宗教や道德の權威者ではない最早や夫自體目的ではない。手段であり、奉仕者である。故に國家は全體社會の代表者として、全體社會內に中心的地位を占めるものではあるが全體社會そのものではなく、それは一つの團體 association であるのである。吾人の社會生活は國家以上に深く廣く根ざして居る。此社會を共同社會 community といふ。共同社會中の全部的なるものが全體社會であつて民族がそれである。國家はその手段とし、その機關としての結合團體である。而して今日、政治と宗教とは全然別のものであり、法律も道德及び宗教とは別のものである。法律と政治は國家のものであるが、道德と宗教その他の文化價値は共同社會のものである。此處に信教の自由以下自由權の社會的意義がある。國家は組織體であつて强制力を持つ。然し共同社會は自律的、自發的成長體である。宗教と道德其他の文化價値が自律的なものとして其處に根ざす所以がある。

家族は如何になつたか、又教會は如何になつたか。

家族は第二期に於て、前時代の大家族主義を殘存せしめ、家族と國家とが未だ分離して居ない。家族は國家組織の一要素を爲して居つた。家長權は國家權力の一部を爲して居つた。封建制とは統一國家と家族主義との中間的折衷物であることは至言である。日本の封建時代の家族を見て居る我々には此事は極めて理解し易い。第三期になつてから個人主義的小家族にと變つて行つた。女子の地位が向上した、一夫一婦制が確立した。家長權は殆んど無くなつた。家族は國家と完全に分離した。家族は今やたゞ消費經濟を共同にし、男女協力し人間としての本性を全うし子女を養育する一小共同團體 association となな

るに至つたのである。

教會は信教自由實現以後自由教會が出來、國家と分離して來た。今日は國立教會と雖も教會としては國家とは別だと考へられるやうになつた。ローマ教會すらもう全體社會としての要求を棄てなければならぬものとなつて來た。今日は教會は一つの信者の共同團體 association である。國家の統制を受けはするもの、宗教そのものに就ては全然自由であつて、信者の共同團體の自治に依りて發展して行くものとなつて居るのである。

扨て以上國家と家族と教會との本質に就て一言したが故に、此より社會問題の一つの背景となる國際社會の發達のことを略述しやう。

今日國際社會が日々發達しつゝあることは何人も疑ふものはあるまい。飛行機やラヂオの發達は今に驚くべく國際交通を敏活容易にし、世界を打つて一丸とする機運を促進するであらう。此國際社會の發達には國家と國家との接近であることのみ考へるのは舊式の考へ方で、それは國家と社會とを分ちて考へることの出來なかつた時代の考へ方である。國際社會の發達とは全體共同社會としての民族が多數相接觸融合して、一つの世界的なる混民族的全體共同社會 international community を現出せんとして居るといふことを基礎的事實として、その上に各民族の構成して居るその團體たる國家同志が、又聯繫せられんとして居ることをいふのである。世界の戰爭は段々内亂化しつゝある。此内亂や決鬪に類する戰爭を止めて、裁判を以て之に代へ、國際治安の組織を實現して、國際間の無政府狀態を絶滅して、道理の行はれる世界としやうといふのがインタナショナリズム又は國際民主主義の主張なのである。實に部族氏族の社會より一層高次の民族の社會へと社會化して來た人類が、今や更に一層高次なる混民族的世界的社會へと社會化し行くのは社會進化の當然のプロセスであると言はねばならぬのである。



扨て、社會問題の本質如何、それは社會の如何なる部分に起つたことであるか、又それと國家との關係如何、教會や家族等との關係如何、以下此點を説明しやう。

## 五

社會問題とは文字通りに社會に起つた問題である、共同社會 community の地盤の上に起つた問題である。第三期の社會が出現したのは商工業、貨幣經濟の勃興、平民の擡頭、それに精神的方面としては宗教改革に依る信教の自由以下の諸種の自由の實現に在る。自由競爭、自由企業、自由契約は實に此時代の根本要諦を爲して居る。精神的に之を基礎付けたものは信仰の自律、良心至上主義、個人人格の尊嚴、自主獨立の精神等である。斯の如くして第三期の近世紀は歴史上未だ嘗て見ることの出來ない尊い進歩をすることが出來たのである。此三期の階段を通過しない社會は他に如何なる長所を持たうが到底言ふに足りない程のものである。然し乍ら機械の發明は社會を一變した。産業革命 industrial revolution なるものは即ちそれである。大きな資本を持つて、機械を据ゑ付け、工場を設備して、多數の勞働者を雇傭して生産しなければ生産は出來なくなつた。此處に問題が起つたのである。自由の社會に自由ならざる別の社會が出來、平等の社會に平等ならざる新なる社會が現出したのである、私は此社會を産業社會と呼んで置かう。産業革命以後の産業社會は封建的階級的權力的專制的なる社會内の新社會と化成したのである。自由は經濟活動としては今迄繫縛されて居つた人間の利己心に手綱のゆるみを與へた。有爲の人士は皆商工業に集まつて、富を爲さんとした、地位を作らんとした。然らざる迄も手腕を振つて自己滿足を買はんとした。プロテスタンチズムは必ずしもアダム・スミスと、もに利己心を是認したのではない、然し、之に近い獨立自尊と人格の尊嚴とを高調して進軍の喇叭を吹いてやつた。キリストの奉仕と友愛と協力との精神を忘れて居つたのでは無いが、それは僅に教會や有志の慈善事業となつて發露し、自由競爭主義の弊を緩和するに過ぎなかつた。基督教の倫理は事業

家の金儲けの手段に對する肘的規範となつて働くことは出來たが、企業なる經濟活動そのものゝ根本動機を決定する力とは始んどなり得なかつた。ペストポリシーでなくても、神の意思として、オネスチーを行ふことが出來たかどうか疑問である。自由競爭の產業社會はそれでは立ち行かぬ社會であるからだ。"business is business" 實業と宗教とは別なものとされたに不思議はない。斯の如き狀態も產業革命以前に於ては恐らく大した問題無く看過出來たであらう。然し產業革命以後は全く別の角度から觀直さねばならぬことになつてしまつた。自由競爭が段々獨占的になつて資本は集中して行く。生產組織は進んで高度となる。資本の私有は權力の私有となつた。下には勞賃といふ代價で買はれて來た澤山の勞働者がその權力下に奴隸的狀態に於て苦役に服して居る。仕事が無くなれば何時解雇されるか分らぬ不安定の狀態に在る。勞賃は人間として生活を支ふるに足らぬ。勞働時間は人間としての修養のためには寸時をも殘さない。仕事は非人格的機械的で單調で routine である。此等の苦役も若し此苦役が社會への公共奉仕を意味するならば忍ばれもしやう。資本家企業家の利己心の道具となるに過ぎないとあつては、問題起らざらんとしても起らざるを得ないのである。勞働主義の擡頭は斯の如き勞働を化して、人格者の勞働としやうといふのである。社會奉仕の勞働とし、協力友愛自治の勞働にしやうといふのである。次に又資本なる權力の私有は一般社會にも向ふことを忘れてはならぬ。一般社會は資本なる權力の爲めに消費者として犧牲となつて居る。利己的生產は消費者の爲めに生產せずして金儲けの爲めに生產して居る。金儲けの爲めならば社會を毒しても構はぬといふ考になり勝なのは資本家氣質(カタギ)の特色である。そして又各產業組織各企業單位間が無政府的競爭狀態にあるのは社會としては絕大の waste である。又競爭主義は組織內部に對しては必ず非人道的專制主義となつて反影する。『立ち行かない』から勞働者を奴隸的に酷使せざるを得ないのである。

社會問題は實に人間の問題であり、人道の問題であり、社會組織の問題である、(此に基督敎の觀方を高調すべし)單なる經濟問題、單なる貧富の問題、單なるパンの問題ではないのである。



產業社會には斯の如き權力が出現し、專制主義が行はれ、デモクラシーなるべき社會、自由平等なるべき社會に斯の如き病的結節が出來て居る。人類は今此解決に當面して居るのである。

斯の如き產業社會の病的結節が國家、國際社會に如何なる影響を與へるかを考へて見やう。

## 六

國家は既にデモクラシーの實現せられたる社會である。職能的共同團體である。或意味に於ける一體である。奉仕と協力との既に不完全ながら行はれて居る社會である。制度組織に於て既に此精神の實現されて居る社會である、然るに新に別に出來たる產業社會の權力關係は國家は反影せずには居らぬ。國家や自治團體の政治は此が爲めにその正常なる軌道から外れさせられる。此等に於けるデモクラシーには歪(ヒヅミ)が生ぜしめられて居る。資本的權力者は國家及び自治團體の政治を自己の利益の爲に運用せしめる。秩序維持の名の下になるべく現實の狀態を持續しやうとする。其處に幾多の無理な抑壓が行はれる。故に今日の民主的國家に於ては最早選擧制度や議會制度等を如何に改造してもそれだけでは到底駄目であつて、產業社會そのものを民主々義化するに非ずんば國家の完全なる民主々義は發揮出來ないことになつて居る。

國際社會は如何、帝國主義は民族國家の集團的利己本能の發露である。國際的デモクラシー實現の社會的根據は international community の發達に在る。international community 發達すれば民族國家の集團的利己本能は弱められる。然し帝國主義を助長し、國際的デモクラシーの實現を妨害するものは、各國內に於ける資本的權力の存在である。資本的權力が自己の利益の爲めに、世界に市場や原料地を求め、その爲めに國家とその武力を利用することが實に今日の國際的デモクラシー實現の大妨害である。故に國際的デモクラシー實現の爲めにも國內の資本的權力を絕滅することは必要缺くべからざることで

ある。

家族は如何、第三期の個人主義的小家族制、一夫一婦の婚姻制は今後こ雖も原則こして動すべからさる所であらう。産業社會の病弊は此處に如何なる影響を與へるか、生活の經濟的根據を脅かされて居る現代の勞働者の家庭は家庭の名あつてその實夫婦こいふ男女勞働者の合宿所に過ぎないものであるこは此方面の學者の一致して言ふ所である。子女の教養に訓育に一家團欒和樂に修養に、今日の勞働者の家庭が家庭こしての理想に遠きものあるは何人も氣の付く所であらう。然らば資本家の家庭は如何、恐らく頽廢の二語を以て盡くされるであらう。斯くして資本主義は、賣淫や賣淫的婚姻や畜妾の害悪を育てる地盤こなつて居るのである。

教會は如何、教會は純眞に宗教的信仰を以て集る者の團體であつて、國家の威武にも屈せず、資本的權力にも諂らはず、純眞の宗教的信仰を發揮して社會を淨むべきものである。それが資本的權力の影響の下に在つては、宗教的信仰の純眞性を發揮するこを妨げられ社會に在りて當に爲すべき機能を麻痺せしめられるここになるのである。

其他學問や藝術が資本主義の爲めに如何なる影響を受けて居るかも十分考察しなければならぬここであつて、此等すべての文化や制度を其本然の所に立ち還らしめ、又その本具の性質を發揮せしむる爲めにも産業社會の病的結節は取除かれねばならぬのである。

## 七

以上は工業方面であるが農業のここも述べて置かねばならぬ。農業も資本主義の影響を受けるが夫自體は工業程資本主義化するものではない。植物こいふ有機體を相手の仕事だからである。工業に於ける資本家に相當する地主の地位は工業資本家こは大分違ふ。此は封建時代の持ち越しである。封建時代は諸侯は地主の大なるものであつたので政治的權力こ土地所有こは結合して居つた。その時代には此土地所有は權力を意味し或る意味での社會的機能も無いでは無かつたのである。然るに土地所有こ政治的權力こが離れた今日こなつては、地主は全然無機能の社會人こなり土地所有權は全然無機能なる權利こなつてしまつた。即ち地主は今日だゞ權利の名に於て耕作者の收穫の分け前を受けて暮して居る寄生的存在物こなり了つて居るのである。權利には社會的機能が無くてはならぬ。權利の與へられて居るのは社會奉仕を爲す爲めである。寄生的存在を爲す爲めに權利は與へらるべきものではない、故に地主の存在意義は最早無いのである。然し乍ら土地は必ずしも國有こするこの必要は無い。國有こして耕作者に耕作權を認めるのこ、耕作者に私有を許して之が轉賣や讓渡や相續や不耕作を認めないのこの間には、實質上には大した差は無いのである。寧ろ耕作者の土地に對する本能的愛着心を認めて私有を許す方がよいかこも思はれるのである。而して耕作は今日の狀態よりは機械の應用も行はるべく協力的組織的にもなるであらうが決して工業生産の場合のやうになるものでなく、根本は個別的分權的なものである。

## 八

以上の如き工業生産に於ける資本の權力的狀態こ、農業生産に於ける土地所有權の無機能狀態こを變じて、産業民主々義 industrial democracy を實現し、産業が公共奉仕 public service の爲めの産業こなり、産業組織内部が自治化し協力化して勞働者生産者の人間こしての尊貴なる人格性が實現せられ確立せられるここが、現代社會の當面の切實なる要求である。此爲めには工業に於ては資本の私有制を廢止して如何なる形に於てか之を公有こし、私利の爲めの生産を變じて社會の爲めの生産こし、私的企業を如何なる形に於てかの公的企業こし、勞働者を私人の奴隷たるここより解放して社會公共に奉仕する公人こし、自治こ協力こが實現せられて生産團體が合理的社會こ變らねばならぬ。又農業に於ては地主の土地所有が廢せられて耕作者に土地の合理的使用が許され、農業が社會の公共奉仕こして或程度迄協力的組織的に經營せられる社會こならね

ばならぬのである。

斯の如き要求と理想とを實現する將來社會の形體は、生産者の自治を出來るだけ認めてのギルド的國家社會主義が最も適合して居るやうに思はれる。國家は何處迄も職能團體としての本質に立脚せねばならぬ。此處に宗教や道德其他の文化價値の自律自由が制度上の保障を保全する。如何に將來社會が社會本位となり組織と協力とが重んぜられても宗教や道德其他の文化價値の自律自由が減却せられて中世紀の權威主義に後戻りしてはならない。此は一方に進んで一方に退歩するものであつて、眞の進歩とはいへない。國家を何處迄も職能團體の立脚地に立たしめることは、實にリベラリズムに依りて獲得したる人類の尊き獲得物を永久に保持する所以である。而して國家は全體社會中の中樞的團體であるが故に、此國家に生産の職能を負擔せしめることが最も適當なことであつて斯くて産業の機能化公共奉仕化が全うせられるであらう。然し乍ら國家は尨大なる組織であるが故に生産者は各自の生産組織内に於て十分の自治が認められねばならぬ。然らずんば資本的制專に代ふるに國家的專制を以てするの結果になるであらう。産業自治 self-government in industry! 此こそギルド社會主義が社會思想に貢獻したる最も大なるもの、一つである。

斯の如き理想社會を實現するは實に基督教の精神と理想とを社會に實現する所以であつて、國家か信教の自由を許し、教會と分離してセキュラライズされても、斯の如き意味に於ての奉仕國家となることは實に眞の意味の基督教國家を實現する所以であると言はねばならぬ。

而して斯の如き理想社會の實現には如何なる道程と手段とを用ふべきか。一つは政黨であり、一つは生産者の勞働組合農民組合等に依る自治的訓練である。政黨は國民的國家的政黨であつてはならぬ、階級的政黨であつてはならぬ。階級鬪爭は産業社會内の社會學的事實としては爭はれない事實である（階級的對立は産業社會内の事實である。全社會的分離や對立を意味するものではない）。然しゾレンとしては否定せらるべきものだ、此處は基督者の十分鬪ふべき所である。階級鬪爭を



是認してはならぬ。此は謬つた方策である。全體社會の爲めにも、勞働者階級自體の爲めにもよくない手段である。鬪爭そのものは認めざるを得ないが、それは愛の爲めの鬪爭、人道の爲めの鬪爭、社會理想の爲めの鬪爭であるべきである。自然主義的、唯物的、權力的、集團利己主義的階級鬪爭は勞働者自體を degrade し、全體社會を決裂に導き、問題解決後に非常に惡い結果を殘す。社會事實としての階級鬪爭を理想鬪爭へと、人道の爲めの鬪爭へと淨め高めることが基督者の勤めである。斯るが故に又其他種々の理由に依りて勞働黨は階級的であつてはならぬ。英國の勞働黨が比較的階級的でないことは賞讃に値することである。階級鬪爭は政治的に行はれてはならぬと同時に産業的にも是認さるべき提據は無い。産業内部に於ては勞働者は組合に依りて協力、互助、自治の訓練を爲すべきである。罷業を否認するのではない、然し罷業も道德的鬪爭であるべき筈だ。資本主義に道德的根據がないからとて之に對する罷業も非道德的であつて差支ないとふ理由はない。勞働者自體を degrade をするやうな手段方法は勞働者自體の爲めに宜しからざるのみならず生まるべき將來社會そのもの、爲めに宜しくないであらう。基督者は宜しく徹底的階級鬪爭否認論者として立つべきである。斯くして事實としての階級鬪爭を淨化し道德化することが出來る。

斯くして政黨と組合との兩方面より漸次に進んで蓄積的、進化的でなくてはならぬ。出來るだけ適法手段で行くべきものである。違法手段が全然承認せられないのではないが、適法手段にて行き得べき可能性がある限りはなるべく適法手段で行かなくてならぬ。急激に違法に實現することは一時に實現せらるゝも逆戻りの憂があり、又十分の訓練と準備とがなくして實現するならば實現してからの運營がうまく行かないであらう。斯く進化的蓄積的漸進的である間に、勞働者を中心としてすべての社會人は來らんとする新社會を迎ふべき道德的訓練を爲さねばならぬ、道德的訓練なくして社會は成立しない。道德の力に立たずして社會組織は維持出來ない。而してその道德の基礎には宗教の力があつて初めて道德としての力を持つことが出來る。此處に宗教が將來社會に對して有する重大なる意義がある。

## 九

此より問題の後半たる社會問題の解決に即しての基督教の立場の反省に移る。

宗教が絶對不變なものでなく時代と社會進化とに應じて適應すべきものであり、變易すべきものであることはあまり異論の無いこと、思ふ。我等の神の體驗は社會の進化と、もに進歩せねばならぬのは明かである。

中世紀の基督教は他律的教權的であつて基督教としてはイエスの精神の眞髓を發揮したものと言ふことは出來ない。プロテスタンチズムは自律自主を敎へ、良心至上主義を敎へ、人格の尊嚴を敎へた。中世紀のカトリック敎よりは遙にイエスの精神の眞髓を發揮するに近いものであつた。然し乍ら沒我と友愛と奉仕と協力とを說くに於て遺憾があつた。新時代の社會的基督敎は次の如きものでなくてはならぬ。

### 第一、神と社會との相即

神のうちに多數人格の共同根抵を見出し此處に共同社會の根抵を認めねばならぬ。多數人格は實に神の裏に在つて共同社會關係に立つて居るのである。共同社會關係は神に根ざして居るのである。斯くて人類相互に愛し合ふ所に神があり、共同社會關係に立つ所に神の閃きがあるのである。斯くて、神を愛することがそのまゝ人を愛することとなり、人類愛が神への宗教愛に根ざすことが出來、神は具體的社會的意義を有する對象となるのである。

### 第二、沒我と否定道の社會的意義

神に己を捧げるといふことが同時に社會に己を捧げることになる意味に於て沒我でなくてはならぬ。沒我とは人格性の滅却でもなく破壞でもない、我執と我欲とを棄てるの謂である、主我心否定の謂である。否定道は宗教の大道である。否定道を通過せずして神に參ずることは不可能である。自己中心の生活態度が少しでも殘存するならば、その人は未だ徹したのではない。法執は我執の一種だ。自己の人格向上の爲めに神を信じて居る人は未だ徹せりといふことを得ない、その人は一種の法執に囚はれて居る人だ。十字架上に於ても倨傲と法執とはある。此等すべての我執を碎破盡してはじめて神と、もに活き神の裏に活きることが出來る。自己に死して神に活きることは人格の徹底社會化だ。人格の徹底社會化無くして將來の社會は運用出來ない。新社會は新人格に依りてのみ實現出來るのである。

### 第三、神への愛と人への愛

人間は社會性を本性をすることは言へ、我欲と我執とが猛くして決して容易に他人を愛することの出來るものではない。之を愛し得しむるは自己否定に依る神への愛である。沒我と否定とに依りて神の愛に活き而してそれが同時に人への愛であつてのみ人類愛同胞愛從つて、平等主義從つて他人の人格への敬愛が出て來る。

### 第四、神への奉仕と社會への奉仕

神へ奉仕することは社會への奉仕を外にして無い。偉大なるものが弱小なるものに奉仕するは弱小なる者の裏に神を認めるが故である。偉大なる者は奉仕するが故に偉大なのであつて支配するが故に又は權力を把握するが故に偉大なのではない。社會に奉仕することに神への奉仕を見出し此處に神を喜ばしむるの滿足を感じ欣喜雀躍の生活態度、利害超越の態度、地上の幸福以上の神よりの滿福の生活を見出さなくてはならぬ。

### 第五、協力は神を實現する所以

主我心あるもの我欲あるものは協力することは出來ぬ。沒我と否定とに依りて徹底社會化したる人格のみがよく協力爲し得る。協力は神への奉仕の爲め神を實現する爲め、社會を改善する爲め、社會を發達さす爲めである。協力は屈從でなく妥協でもなく、個性の滅却でもない。協力は自主自律を前提とする。自主自律の人格者が自己の自由なる人格に依りて協力して初めて眞の協力である。徹底社會化したる人格は神の爲め、當然協力出來るのだ。實に協力は自主自律を前提とし而もそ

れよりも一層高次の綜合的原理である。自主自律をアウフヘーベンしたる新しきシンテシスである。

## 十

以上の如きがイエスの宗教の精髄だと信ずる。中世紀の教權主義のカトリック教は論外とし、自由主義の時代に何故如上の宗教的眞理が發揮されなかつたのだう。何故愛を說き乍らも自主自律と良心主義人格主義の一面に偏したのだらう。私は時代が未だ來なかつたのだと思ふ。自主自律や良心主義人格主義は基督教の小乘だ、今や未顯眞實の基督教の大乘を發揮する時が來た、社會が其處迄進んだのだ、西洋に於ても日本にても。教會よ目醒めよ、神學者よ此神學を組織せよ、基督者よ此信仰を體驗せよ、社會よ、イエスの此尊き精神を我物とせよ、斯くしてのみ新社會は建設せられ得る。



# 新時代とイエスの宗教

## 一

イエスの福音は『神の國』の福音である。イエスが傳道の最初に敎へ給うた所は『神の國』は近けりといふことであつた（マタイ四〇二三　マルコ一〇一四　一五）。又其弟子達を四方に遣して宣べ傳へしめ給うた所も又此に他ならなかつた（マタイ一〇六―一五　ルカ九一―六）。

此『神の國』は現實の社會に於て、各人の悔改に依る人格の更生と、之に基く社會關係の更改に依つて實現せらるるものであることがイエスの精神である。固よりイエスは當時の時代思想としての終末觀的神國思想も持つて居られ、『神の國』の此世の終末として突然到來するものなるを信じて居られ又其到來の極めて近きを信じて居られたことも事實である。此必然的到來の信念の上に現社會に於ける實現を說かれたものに他ならぬのである。人間の自由努力と神的必然とが一致することが宗教生活の特色である。神的必然の線に沿はない人間の努力の畢竟空なることを想へば、『神の國』の實現に神的必然の信念が前提となることは極めて當然である。吾人はたゞユダヤの當時の時代思想とイエスの獨創である永遠の價値ある信仰とを十分區別しなければならぬ。イエスの獨創であり永遠の價値あるものは、神的必然の信仰を基礎として、『神の國』を現實社會に建設することである。

### 『神の國』とは如何なることであらうか

第一、『神の國』は愛を基礎とす。イエスの宗教が愛の宗教であることは多言を要せざる所であるが、イエスは己を愛する

者を愛するだけでは足りない、兄弟にのみ挨拶したのでは足りない、敵をも愛し、自分を責める者の上に祝福を祈れと教へられた。此が實に天の父の子となる所以であり、天の父の子たるものは天の父の全きが如く全くあらねばならぬと教へられた（マタイ五四三―四八）。神の愛を基礎としての人類愛、同胞愛、此がイエスの宗教の基調である。人と人との關係即ち社會關係を此愛の關係に依りて深め淨め强めることを、『神の國』建設の第一要諦とする。之を今日の社會學の言葉でいふならば、共同社會 Gemeinschaft, Community を神の愛に迄徹底せしめ高揚せしめ、深化し淨化することに外ならぬのである。

第二、『神の國』は權力關係の否定である。此社會には權力關係なるのが絶えない。武力、富力、智力等の勝れたるものがその力を利己的に用ひて他人を自己支配下に壓迫しその利己的滿足の道具として居るのである。封建的專制政治の下に於ける治者と被治者との關係、資本主義制度の下に於ける資本家と勞働者との關係、現代國際社會に於ける帝國主義的强國と弱少民族との關係等、權力支配の關係の大なるものである。權力支配の關係こそは人類原始時代よりの一大事實であり又一大病弊である。此は利己心に基く。愛無きに基く。『神の國』は此權力關係の否定である。神の愛に依りて人と人との關係を融解するときは權力關係は消滅する。能力の相違は如何ともすることは出來ない。然し能力の相違は權力關係を奉仕關係とすることに依りて却りて意義のあるものとなる。イエスは大なる者人の首（カシラ）となるものゝ、却りて人に使はれ、人の僕（カモベ）となりて奉仕すべきものなるを教へ給うた（マタイ二〇二〇―二八　マルコ一〇三五―四五）。

第三、『神の國』は利己的鬪爭關係の否定である。利己的權力が互に對立すれば鬪爭關係となる。個人と個人との間、民族と民族との間、階級と階級との間に、古來鬪爭の絶えたことが無い。此は人間の利己心に原因して居る。愛無きに起因して居る。神の愛に依りて人と人との關係が變つて來るならば、共同社會の關係は深められ廣められ鬪爭關係は自然に消滅する譯である。『神の國』は實に鬪爭關係の消滅し、愛の關係を基礎としての協力の社會であるといへる。



## 二

イエスの斯の如き『神の國』が新時代に對して如何なる意義を有するか。此處に新時代といふは既に『其督教と社會問題』に於て記したるが如く、來らんとするインタナショナリズムとインダストリアル・デモクラシーとの第四期の社會を意味する。來らんとする時代の宗教は愛と奉仕と協力の宗教でなくてはならぬ。而して私は之をイエスの『神の國』の宗教に於て見出し得ると思ふのである。

吾人今日の社會學の智識を以て表明すれば『神の國』とは共同社會の神への徹底を意味する。

『神の國』は觀念的に各人の內心に於て內觀的に見出され得べきものではない。佛教の本地の風光、又己心の淨土といふが如く、我心に求めさへすれば得られ、此世の觀方、考へ方を變へさへすれば得られるといふ、內觀的觀念的寂靜的なものではない。

又『神の國』は從來の教會が教へたやうに、社會關係とは無關係に考へられたる個人の靈が、ユダヤ教的超越神の前に、キリストの代償的贖罪に依りて律法的罪惡より救濟せられ、その救濟されたる信者が相集りて作りたるだけの社會即ち教會を意味するものでもない。

『神の國』は實に神に依る人格の更生と同時に、その人格の作れる社會關係の神に依る更改を意味する。神に依る人格の更生とは利己的非社會的なる自我に死んで、神に大活し、自己中心の生活より神中心社會中心の生活に入ることである。此は全く人格の更生を意味する（ヨハネ三一―九）。神中心、社會中心の生活は愛の生活である。愛の生活に依りて、權力關係を融解し是正して奉仕の關係と變ずるのである。鬪爭關係を融解して協力の關係とするのである。個人の人格は社會を離れて考へられてはならぬ。個人といふは無數の社會關係の中心である。社會關係を網に譬へることが出來るとすれば、個人人格は

實に網の結び目に相當する。結び目あるは必ず網を前提する。又網は必ず結び目あるに依りて成立する。個人人格の更生は必ず其構成せる社會關係の更改とはらなければならぬのである。

『神の國』の宗教は斯の如き意味に於て社會的宗教である。然し乍ら此處に社會的といふは國家の意味ではない。國家は一種の職能團體であつて決して全體社會ではない。又教會の意味でもない。教會も一種の職能團體であるに過ぎないものである。其他如何なる組織團體の謂でもない。實にすべての組織、すべての制度、すべての團體の基本となり、而も又此等を或意味に於てその内に包含する共同社會の謂である。『神の國』の實現は實に人格の更生に依る、共同社會の神への徹底であると謂はなければならぬのである。見よ人類の社會に共同社會の發達するにつれて、權力關係は變じて奉仕の關係となり、鬪爭の關係は變じて協力の關係となりつゝあるのではないか。中世紀の武斷的專制的階級國家は民族なる共同社會の發達と、もに立憲國となり、民本國となつて、國家權力は機能化し、協力自治の國家を現出するに至つたではないか。權力的利己的鬪爭の行はれて居る國際社會の内に混民族的世界的共同社會が形成せられ、成長するにつれて、鬪爭關係は變じて協力關係となり、權力支配の關係は變じて奉仕の關係と變ぜんとして居るではないか。又產業社會に於ける勞働階級の出現も同じく之を物語つて居るではないか。勞働階級といへばすぐ階級鬪爭を考へ、他の階級に對する對抗的方面を念頭に浮べるのが常であるが、今暫くその方面を見ずして、階級なる社會の内部を見るならば、勞働階級は一種の共同社會であつて、社會化の一層進んだる、兄弟主義に立脚せる社會だといふことが出來るのである。即ち今日の產業組織は必然に其生產關係よりして、斯の如き共同社會を孕んで來て居るのである。資本家社會はもと〳〵自由競爭といふ利己的鬪爭の社會である。共同社會の關係としては未だ淺いものである。勞働階級は產業組織に伴ふ必然の物的機緣に依りて共同的に結合せられたる兄弟主義の共同社會である。奉仕と協力とはその必然の原理である。斯の如きものが資本主義の產業組織内に孕まれたといふことが、權力支配と利己的鬪爭との今日の產業社會をして、奉仕と協力との產業民主主義の組織へと轉化せしめずんば止まざる社會學的



へ根據ではないか。

故に私はいふ共同社會の發達する所、權力關係は變じて奉仕の關係となり、利己的鬪爭の關係は變じて、協力の關係となると。

今『神の國』とは斯の如き共同社會の神に於ける徹底であり深化である。此處に於て神と共同社會とのことを考へなくてはならぬ。

## 三

イエスの神が佛教の眞如や絕對の如く、觀念論的内在的なるものでないことは言ふ迄もない。如何にも一如的に人と人とが大我に沒入して一體を爲し、我他彼此の差別をしないといふ佛教の神觀は、一種の愛の宗教に違ひない。然し此では個人の人格は沒了せられ、道德的價値は減却せられ、冥想的寂靜的沒我教となつてしまふ。イエスの人と人との關係觀は何處迄も人格を活かし、道德的價値を高調しての共同社會的なる觀方であつて、佛教的神觀から來るのとは異るのである。

又イエスの神はユダヤのエホバ神の如く律法と正義とを以て、上より人類を支配し統治する超越神でないことは明である。神が超越的であるならば神と人との間は隔絕し、從つて人と人との間も隔絕する。此等相互の間には峻嚴なる正義と律法とは行はるるも、温い愛の關係は成立し難い。社會學の語を假りて言へば、斯の如きはゲゼルシャフトの宗教ではあり得るもゲマインシャフトの宗教ではあり得ない。從來カルヴイン系統の新教はあまりに神をユダヤ的超越的に解し過ぎた。プロテスタンチズム殊にピユリタニズムが商品交換社會の宗教であり、ゲゼルシャフトの宗教であり、極言すれば資本主義社會の宗教であつたことは決して遇然でない。その律法的ユダヤ教的超越神觀に根本原因を有する。イエスの神觀は斯じて斯の如きものではない。イエスの神はもつと我々に親しい温いものであり、從つてイエスの觀たる人と人との關係はもつと肌と

肌との暖みの通ずる温い近い關係である。

佛教的內在的觀念論的唯心論とユダヤ教的超越神觀とを巧みに折衷混合したものがある。それは英國のグリーン・ケアード等の一派である。曰く神は各人の裏に內在する各人の合理的自我眞自我は即ち神である。然れども此神は自我實現の過程に依りてのみ實現せられる所のものである。此實現せらるべき理想我としては多人格は結局一元に歸着するものであると。此神觀は一面多人格の共同根抵としての內在の神を認め、同時に此が寂靜的沒人格的沒我とならざらんが爲め自我實現をいふ。如何にも巧妙に觀念論的內在神觀とユダヤ教的超越神觀とを結合させたものである。然し此もイエスの神觀を去ること遠いと思ふ。イエスの神觀は決して觀念論的唯心論ではない。イエスは理論や哲學を說かれなかつた。故に理論や哲學に於て左樣でなかつたといふのではない。イエスの心持が、行動が、生活が左樣でなかつたといふのである。イエスの觀た自然や人間は活き活きとして蘇かな生命に溢るゝ現實在である。此天地は決して『我の觀念』ではない。又神はグリーンやケヤードの謂ふ意味に於て『我』ではない。なるほど各人の自我を極限迄理想化し合理化すれば神になることは認めなければならぬ。然し斯く無限に延長せられたる極限の自我に於てのみ、多人格が共同根抵に立ち得て居るのであるとしたならば、人格と人格との間隔も隨分深くて遠いと感ぜざるを得ない。此は自我觀が間違つて居るのである。不自然なのである。自我があまりに引延ばされて居るのである。自我の間が延び過ぎて居るのである。此では人と人との間があまり風通しが良過ぎて索然として寒冷に過ぎはすまひか。イエスの自我觀はもつと自然で、理想と正善に向つて努力し、罪惡と苦惱と鬪つて居る有りのまゝの自我がそのまゝ、他の自我とピタリと温く接し合ひ、そしてそれが温い父なる神に、そのまゝ抱かれて居る底のものである。



## 四

イエスの神は『天の父』であつて、人類は此父の故を以て『兄弟』であるとされる。イエスの神は我等に無限の親しみある温い慈愛の父であつて、我等人類をその大御懷（オホミフトコロ）に抱きしめ給ふ父である。人類は御互に、神の温い慈愛の大御懷に抱きしめられ互に肌の暖みの觸れ合ひ通ひ合ふ所の兄弟である。之を哲學的に表現するならば、神は社會を自己のうちに包容し、或意味に於て之に超越しながら、同時に共同社會の根抵となり、多人格の共同根低となり、社會を貫通して內在するものである。

吾等個人個人の生命は決して個人個人に終始するものでない、親子兄弟親族といふ如く、生命は連續して普遍であつて、人類すべてが普遍なる生命を有すると考へることが出來る。此生命は更にすべての動物すべての植物迄及してその普遍なることを考ふることが出來る、實に個人の生命は決して孤立するものではない。宇宙の普遍なる大生命につながる所のものである。神は實に宇宙のすべての生命の源にしてすべての生命をそのうちに包容する所の普遍的大生命である。

然し神は單純なる生命ではない。生命であつて又同時に人格である。人格とは何であるか。人格は統一を意味する。吾人の行爲に統一が無いならば吾人は人格ではない。統一があるとは吾人の行爲に選擇があることである（行爲のみならず認識にも審美にも其他の心作用にも統一があるが、此等は結局意思を基本とするものなるが故に、行爲の統一は結局すべての統一中の基本的なるものと觀られ得るのである）。　選擇の無い行爲は本能と衝動のまゝの行爲であつて、動物と異る所は無く、人格といふことは出來ない。人格とはその行爲に選擇があり統一があることを意味する。此選擇と統一は價値と規範とを前提とする。價値と規範とを前提せずしては行爲に選擇あり從つて統一あることを理解することは出來ない。而して價値と規範とは或普遍を前提せずしては考へられない。多人格が或普遍を前提として規範と價値とに服從して共存するものが共同社會である。されば共同社會には必ず普遍者が前提せられる。此普遍者を前提として道德的價値、認識的價値、審美的價値が成立し得る。此普遍者こそは多くの人格をして一に歸せしめて居る原理である。而して此普遍者こそは共同社會を自己のうちに包容し多人格の共同根抵をなせる絕對人格を內部より觀たるその一壁面である。實に神は絕對人格として、價値や規

範成立の根源として、人類の共同社會を自己のうちに包容してその成立の根本となつて居る所のものである。神は實に斯の如く普遍生命にして絶對人格である。

神は社會をそのうちに含む。同時に神は社會のうちに貫通して活きて働く。社會は決して出駄羅目ではない。我等は日常の社會生活を通して何時でも神を觀ることが出來る。試みに眞心を以て他の人格にブッツカリ見よ。必ずや他の人格の眞心を引き出すことが出來る。眞心と眞心と觸れ合ふとき、吾人は社會を以て多元孤立の生活と考ふることは出來ないのである。ばに「人より人への架け橋は無い」一人の個人から他の個人への通路は無いかの如く見える。然し眞心を以て觸れ合ふとき人と人との奥の院は互に通じ合つて居ることを感ぜざるを得ないのである。社會生活は體驗である。從つて斯の如き一元性も亦之を論證することは困難なるも體驗に訴へるならば明白疑ふことの出來ない事實となる。此處に吾人は絶對人格の神の閃き、社會に活きて働き給ふ神の片鱗を認むることを得るのではあるまひか。

斯の如き絶對人格と、多人格より成る共同社會との關係は、月の本體と、湖上の小波の上に映ずるその影との如き關係に譬ふることは出來まひか。天上に、中空に、絶對人格なる神が仲秋の滿月の如く澄み亘る。故に湖上の千波萬波に瀲灩として月影が千々に碎けて映るのではあるまいか。絶對人格の姿を宿して人類は共同社會を作つて居る。規範と價値とに服從して生活せる吾人の社會生活。それは何處より押して見ても、何の方面より叩いて見ても、何處かに絶對人格の實在せるを示して居るのである。

絶對人格なる神は實在す。實在して此自然と社會とに自己を實現して行く。神は未來に之を仰いでは吾人の絶對理想であり、現實に之を省みては部分的に實現せられたる所の一元的生命であり、過去に顧つては未だ實現せられざりし所の價値である。神の自己實現は自然と社會とこの進化であるが、此自己實現は人類にとりては神の意思としての絶對の必然であつて、同時に、人類の側に於ての自由努力に依る神の發揮に他ならぬ。人間の自由努力と神の絶對意思とは斯くして相卽して同一事の兩面觀である。

斯の如く神は自然に内在し又それ以上に社會に内在して此天地に活きて働き給ふ所のものでつて、此意味に於ては神は内在的であり汎神的である。然し乍ら神は同時に自然と社會とを自己のうちに包含し、之を統合し、之に超越して、更に此よりも大に、我等をして『聖き父よ』『愛の父よ』『正しき父よ』と呼んで之に對立せしめ給ふ。此意味に於ては神は確に超越の一面を有す。神は實に自然と社會とに内在して之を貫きて存在するのみならず、又之をそのうちに包容し憑意味に於て之を超越して存在す。Pantheism といふ言葉が斯の如き神觀を意味するものならば、イエスの神觀は確に Theism に非ずして Pantheism に非ずして正しく Panentheism であつたであろう。

## 五

イエスの神が斯の如き神であつたことは何に依りて知られ得るか。イエスはその三福音書に於て神を父と呼べる外、神觀に就て哲學的神學的には何等説明する所は無い。從來の教會の神觀の如くイエスの神を以てユダヤ教的超越神の如く解する根據が何處に在るか。たゞ傳統的に斯く解し來つたといふ外あまり多くの根據はあるまひと思はれる。或は歴史的研究に依りて當時のユダヤの神觀や其他イエスに影響を及ぼしたであらうと思はるゝ周圍の神觀が、皆超越神觀であつたが故に、イエスの神觀も亦其軛嚮を脱したものではないといふかも知れぬ。然し此はあまりに社會環境や歴史的傳承を重視し過ぎて、イエスなる個人の獨創を觀過し過ぎるものである。イエスには大獨創があつたに違ひない。イエスの現世的神國思想旣にイエスの獨創であるとするならば、其基礎となる神觀も亦イエス獨特のものであつたと觀るに何の不思議がある。蓋しイエスの神觀の内容は歴史的文獻的研究に依りて明にすることは結局不可能な事であろう。たゞ此處に直接イエスの神觀を確め得べき一つの途がある。それは吾人イエスの生活と行動とより推して、その如何なる神觀より出で來つたかを自分の體驗に依りて知

ることである。蓋し神は哲學上の原理に非ず、宇宙說明のための要請にも非ず、實に實生活の根本的生活原理を爲すものである。一言にして言へば神は生活すべきもの行動すべきものであるが故に、その人が如何なる神觀を懷くかはその人が如何なる生活と行動を爲すかに直接顯れるものである。生活と行動が神觀の外的發露であるとすれば、生活と行動の外的發露より推してその如何なる神觀より發露せるかを知ることが出來る筈である。然しそれは決して論理や哲學に依りて知り得るに非ず、吾人自らの體驗に依りて知り得られるのである。イエスは神の熱愛に感激して贖罪愛に燃えて、罪人や遊女(アマビ)や取稅人等と交りて、之に神の熱愛を注ぎ、斯の如き社會より棄てられたるヤクザ物のうちに、神を愛する心、社會を愛する心を喚起せしめて、『神の國』建設の要素と化せしめ給うた。九十九匹の羊を措いても一匹の迷へる小羊を探し求むるが如く、失はれたる人、墮落せる者を求めて、之を神と社會とに立ち還らしめ給うた。斯く何處迄も社會に熱愛を以て働きかけ、奉仕的態度を以て献身して行く態度は、人と自分とを神に依りて繫がれて居る兄弟だと觀て、之に熱愛を感ぜざるを得ざるが故である。罪人のうちにも遊女(アマビ)や取稅人のうちにも尊き人を見出し尊き神の子を見出し、自分の兄弟を見出すが故である。彼は人類すべてを兄弟として抱きしめずには居られなかつたのである。兄弟のうちの病める者、罪に沈め者、亡び行かんとする者を見ては眞に溜らなかつたのである。斯の如き生活斯の如き行動。此が如何なる神觀から出て來たであろうかを考へれば最もよくイエスの神觀を明にすることが出來るのである。斯の如き行動と生活とが佛敎の觀念論的寂靜的汎神觀から出て來るであろうか。答は言はずして明である。ユダヤ敎的律法的超越神觀から出て來たであろうか。此も明だと思ふ。グリーンの、自我實現的內在神觀の如きものより出て來つたであらうか。此も殆んど說明を要せずして明だと思ふ。赤の他人を、罪人を、墮落せるヤクザ者を、癩病人を、貧者を我兄弟よと呼びかけて抱きしめ、その爲めに奉仕し、それと協力する生活の前提となる神は、吾人人類を溫くその大御懷(オホミフトコロ)に抱きしめ給ふ父の神でなくてはならぬのである。御互は神の御懷に抱かれて御互の心臟の鼓動が響き合う程肌と肌とかピッタリと觸れ合つて居るのである。そしてともに神の心臟の大きな鼓動が御互



の身に傳はつて來るのを感じ得られるのである。かくてこそ御互は兄弟同志なのだ。

## 六

今『神の國』とは吾等人類の共同社會の根抵なる神を自覺して、共同社會を神に迄徹底せしめることである。我等が古き自我を棄て、非社會的利己的自我に死んで共同社會を內に包容し且其根抵なる神に大活し、更生の新人格徹底社會化せる新人格となつて、吾人の形成せる社會關係を更改することである。吾人人格の根抵は神に根ざす。同時に吾人の形成せる社會の根本關係も亦神に根ざす。此根本關係を神に依りて更改する。其處には幾多の權力支配の關係や利己的鬪爭の關係がある。之を愛に依りて融解して奉仕と協力との關係に更改して行く。此が『神の國』の建設である。米國の或學者は "Kingdom of God" は言葉が惡いから "Commonwealth of God" といつた方がよいと言つたといふことである。私をして言はしむれば "Community of God" "Gemeinschaft Gottes" といひ度いのである。實に神の愛に感激せるもの、身邊は如何なる環境にあつても、如何なる境遇にあつても、常に春風四圍に薰んじ、之に接する者觸るゝものをして、神の愛を感ぜしむる程のものである筈である。斯の如き意味に於て救は個人の靈に成るのであるが同時にそれは社會に實現せらるれのであるといはれ得る。宗敎は內的なものであり個人的なものである。然し同時にそれは斯の如き意味に於て社會的なものである。救は先づ自己の心に成り、四圍の社會に薰じて社會關係の更改となり、更に遠く大にしては、社會改造の運動ともなる筈のものである。『神の國』運動を單に政治運動や廢酒廢娼の運動や又は勞動運動社會運動に同じと見てはならない。此等は單にその部分的外部的發露に過ぎないのである。根本は人格の更生と社會關係の更改である。宗敎は實に個々の細胞を健全にして社會全體を健全にする所のものである。

## 七

斯の如き『神の國』の實現こそは此天地間に於て最も尊いものである。之を求めることが人生の第一義である。（マタイ六三三）。此は全所有よりも尊ぶべく（マタイ一三四五 四六マタイ一九一六―二二マルコ一〇一七―二二ルカ一八一八―三〇）父母兄弟等の血肉よりも尊ぶべく（マタイ一〇三四―三九）又肉體的生命そのものよりも尊ぶべきものなること（マタイ一〇三八 三九マルコ八三四―三八ルカ九二三―二七）をイエスは敎へ給うた。

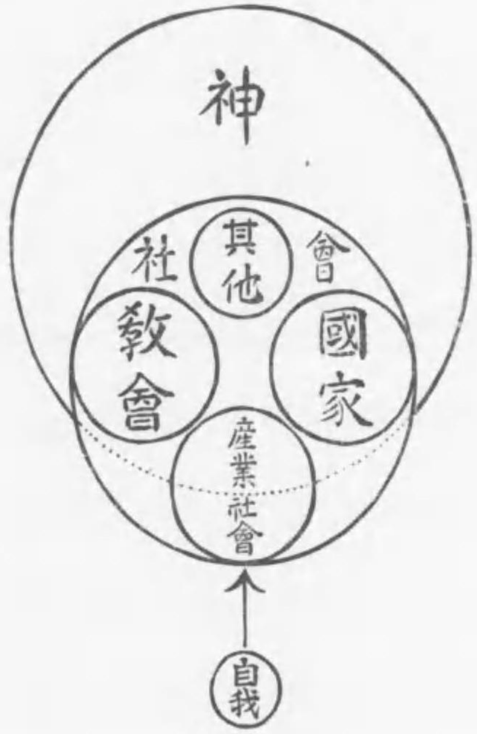
『神の國』を實現することは人間の自由努力であると、もに、又神の意思に基く必然である。神は人を用ひて之を實現せしめ給ふ。神は人を導き敎育して此奧義を悟らしめ給ふ。外界の生起は單なる因果律のみに依つて觀ることは出來ない。因果律は自然生起の一つの認識形式に過ぎない。科學的觀方が自然の觀方の唯一の觀方ではない。信仰を以て觀るならば生死病老、愛別離、怨憎會、其他事業の失敗も社會的失脚蹉躓も、すべて温き神の敎育的御攝理の手の加はつて居ることを知ることが出來る。斯く觀て人生のすべては奇蹟である。神の御手の行ひ給ふ奇蹟である。人間は神の敎育的御攝理の手に依りて導かれて、何かの機會に靈性が覺醒せしめられ、神の存在に目醒めて、『神の國』の人生第一義なることを知るに至るのである。更に、神は個人個人を敎育し指導して覺醒せしめ給ふのみならず、之を用ひて『神の國』の建設の爲めに働かしめ給ふ。斯くして、生死病老其他自然界の生起は『神の國』建設の爲の神の意思に基く奇しき經綸的御攝理である。この信境に到達することが出來、我等は常に『父よ、御心のまゝに爲し給へ』といふ、小兒の如き信賴の境地と又磐石の如き安心の境地に立つことが出來、神の御惠に欣喜雀躍の生活を送ることが出來る。

## 八

神の愛、神の有難さは科學哲學では證明出來ない。ライプニッツ以下あらゆる辨神論（テオヂセー）は學問としては殆んど無意味の冗辯である。たゞ己を否定して神に服從するものにのみ神の愛と有難さとが解る。讀者よ試みに自己の惡習慣と思ふ所のものを棄て、善に遷り、利己心と思ふものを否定して、如何に小さな事でも他人を愛する行爲をして見られよ。然らば貴方の心のうちに、すがすがしき一種得も言はれぬ嘉賞の心境を經驗するであろう。それを擴大して行けば神の愛と有難さとが解るのである。宗敎には自己否定が無くてはならぬ。自己を否定して、神を活きる生活、それが宗敎生活である。斯の如き意味に於ては沒我的態度こそ宗敎の唯一眞正の生活態度であるといはねばならぬ。然し乍らイエスの沒我は寂靜の沒我人格減却の沒我ではない。行動の沒我である。道德的沒我である。之を私は寂靜的沒我に對して動的沒我と呼び度い。動的沒我は道德的價値の減却人格の沒了では有り得ない。動的沒我には正義がある。人格尊嚴の承認が伴はねばならぬ。正義と人格承認とは社會に於て愛を分配する分配の尺度であり規準である。されば動的沒我とは正義と人格承認の伴ふ沒我的愛であるといふことが出來やう。

次に神と社會と自我との關係を圖示する。圖中自我は固より社會の一員としての自我である。社會の根柢が神に在ることの當然の結果自我も又神に根柢を有するものである。此處では二つのことを同一圖で表すことの困難なるため、假に自我を以て神と社會とに對立せるもの、やうにして、主として自我の神に對する沒我的献身奉仕が同時に自我の社會に對するそれを含むことを示す。

## 九




神の愛には必ず正義と人格承認とが伴ふ。愛を正義や律法より演釋することは出來ない。然し愛からは必ず正義と道德律と人格承認とが出て來る。正義と人格承認の伴ふ愛を以て、人の心に同樣なる愛を喚起せしめて行く。之を贖罪の作用といひ、斯の如き愛を贖罪愛といふ。イエスの愛は斯の如き贖罪愛であり、贖罪作用の伴ふ愛であつた。イエスは熱烈なる神の愛を以て人を愛し人の心に神を愛する愛を喚起し給うた。イエスの肌は神の愛に熱せられてホテリにホテツテ居た。宛も牝鷄が卵を抱いて其昂昇せる體溫を放散せざるを得ざるが如くに、イエスに於ける神の愛の衝動は愛の欠乏せる罪人、遊女、取稅人の冷き肌を抱いて、自己の熱を之に傳へざるを得ざらしめた。斯くて此熱愛に觸れたものはすべて、神を愛する靈性社會を愛する社會性を喚起せしめられたのである。此世の中には人を墮落せしむる愛もある。盜賊の慈悲の如く、姦夫の戀情の如きそれである。又殆んど贖罪的作用の伴はざる愛もある、人情自然の愛は多くこれである。神に依れる愛は光よりの愛であり、義の伴ふ愛である。必ず贖罪作用を伴ふものである。イエス一生の仕事は此贖罪愛に依りて人を救うて『神の國』の人とならしむるに在つた。之を除いてイエスの使命を考ふることは出來ない。イエスは此爲めに其生命を捧げて最後に十字架につき給うたのである。十字架は實に此精神の最高潮であり、此生活のクライマックスである。さればイエスの宗教より贖罪の精神を取り去ることは出來ない。イエスの宗教が兄弟主義の宗教であり『神の國』の宗教であることは同時に贖罪愛の宗教であることを含んで居る。之を抜きにしてはイエスの宗教は考へ得られないものである。贖罪愛は實に基督教の根本精神であるといつても過言ではないのである。

贖罪愛は實に斯の如く基督教の大切なる根本精神なるが故に、早くより固定して教儀（ドグマ）となり或は法律的代償的贖罪論の形をとり、或は祭司的燔祭的贖罪論の形をとつて教會内に行はれ來つた。舊式神學や正統派の信仰は今日もなほ此教儀を高調する。ユダヤ教的超越神觀に立ち法律的罪惡觀を持ち、而してキリストの十字架の法律的代償的贖罪或は祭司的燔祭的贖罪を高調する。その信念には強いものがある。固いものがある。新神學やリベラル・クリスチャニチーに無い強い固いものあるを認めなければならぬのである。然しキリストに贖はれることのみ高調して何故進んでキリストとともに贖ふ態度に出でないのであるか。何故社會より切り離されたる個人の靈の救極のみを考へて、個人が社會に働きかけることをしないのであか。蓋し斯く出來ないのが當然なのである。斯の如き宗教は個人の靈を清め、正しき生活を爲さしめ、強く自己の所信を主張す

る人間を作り得たであらうが、進んで社會に働きかけ自己を没して社會を愛し、社會に奉仕する人間を作るに於ては欠げたる所があつたのである。個別の責任を意識する人を作りたるも、一層高次の連帶の責任を解する人を作り得なかつたのである。自由を主張し高蹈を尊ぶ人を作り得たるも兄弟主義に活き、協力の精神に行動する人を作り得るかつたのである。ピュリタニズムは、幾多の長所と美點とを備へながら要するに個人主義の宗教であり、資本主義の宗教たるを脱し得ないのである。

『新神學』やリベラル・クリスチヤニチーは贖罪の教儀を否定した。法律的代償的贖罪論や、祭司的燔祭的贖罪論の否定さるべきは當然である。『新神學』やリベラル・クリスチヤニチーが贖罪の教儀を否定して、之を合理化し、そのうちに秘められたる眞精神を摘出したるは確にその貢獻である。『新神學』とリベラル・クリスチヤニチーは、又ユダム教的超越神觀を寛和し、法律的罪惡觀を精神化した。斯くしてイエスの宗教そのものに近かんとした。誠に尊き近歩であつたと言はねばならぬ。然し乍ら未だイエスの眞の神觀に徹することが出來て居ない、依然として多分にユダヤ教的超越神觀の殘物を包藏してゐる。從つてピュリタニズムと同じく個人主義的社會觀を脱し得ない。又贖罪の教儀を合理化し其眞意義を摘出し得たるも、之をキリストと信者との關係の説明の問題としてのみ取扱ひ、自らイエスとなりて贖罪愛を實行する態度に出づる所迄徹底せざるがため、個人の人格の社會關係より分離したる完成のみを高調し、自ら社會に働きかけ奉仕と協力の生活態度に出づることが出來ないのである。贖罪は論ではない。教儀ではない。キリストと信者との關係の説明の問題ではない。實に信者がイエスとともに、イエスとなつて實行しなければならぬ精神なのである。我等がイエスの神を我神とし、兄弟主義の社會觀に立ち、神の愛に感激して、イエスとともに贖罪の態度を以て行動するとき、我等は個人主義よりも更に高次の社會本位の生活態度に出づることが出來る。斯くしてキリスト教は共同社會育成の宗教となることが出來る。斯くしてのみ又各個人は天の父の完全なるが如くに自己を完成することが出來る。從來責任の個別性を高調するに急にして（それは封建時代の遺物を打破する爲めには極めて必要であつたが）其連帶性迄自覺を高めることの出來なかつた基督教は此處に贖罪論のコペルニカス的轉回を行うて新時代に乘り出す必要がある。

私は以上の如くイエスの眞の神觀に立ちて、神に己を捧げ、神への愛が人への愛と離すべからざるを悟り、兄弟主義の社會觀に立ちて友愛の精神に充ち、常に贖罪愛を以て人を愛し、神への奉仕として社會に奉仕し、神を社會に實現するために人と協力して行き『神の國』を此社會に實現することに最高の喜びと祝福とを感じて生活するものを以て新時代のクリスチヤンなりと信ずるものである。（終）

308
627

昭和二年六月二十七日印刷
昭和二年七月　五　日發行

著作者　京都市塔ノ段毘沙門町四五九　中島重
發行者　京都市上京區新北小路町六百十二番地　吉田勘三郎
印刷者　京都市上京區二條通高倉東入觀音町　植苗寅吉
印刷所　京都市上京區二條通高倉東入觀音町　正文舍印刷所

終